

ポストホブソンの中国文西洋医学書

松本 秀士

提 要

本稿主要论述，英国人传教士合信后刊行的中文西医书的意义。合信最代表的西学著作《全体新论》只不过是拥有西医的概略。《全体闡微》是美国人传教士柯为良考虑《全体新论》的性质，而编译成中文的人体解剖学教科书，实际上是中国的第一本。它刊行后的来华传教士，基本上都采用了柯为良定译的中文解剖学名词，而编写了各种西医教科书。

另一方面，当时的中国传统医学都把《全体新论》当作西医经典，而解释了西医。总之，在晚清的中医，虽然合信后的传教士把专门性的西医内容传到中国，但还是以《全体新论》所说的概略为主而理解西医。

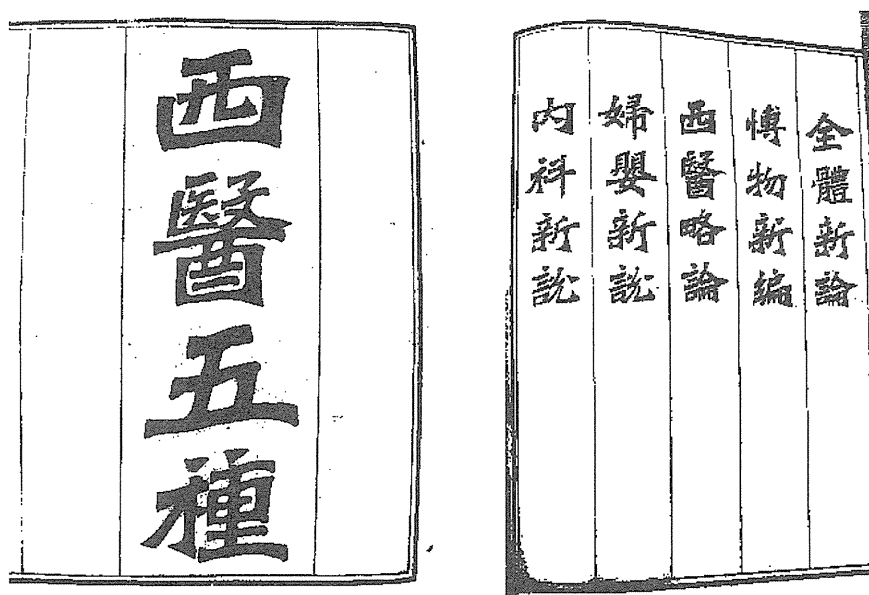
はじめに.

英国人医療宣教師ベンジャミン-ホブソン(Benjamin Hobson 1816-1873 中国名;合信)による『全体新論』(1851)は、西洋医学が最も基礎におく人体解剖学を、中国文によって近代中国にはじめて伝えた書として今日も評価される。しかし、ホブソンに続く医療宣教師たちは、『全体新論』をはじめとするホブソンによる一連の『西医五種』を、西洋医学の概略をもたらしたに過ぎないと批評した上で、本格的な専門書としての中国文西洋医学書を次々と刊行していった。その一つに、オスグッド (Dauphin William Osgood 1845-1880 中国名;柯為良)らが人体解剖学の専門書として中国文に編訳した『全体闡微』(1881)がある。『全体闡微』で定められた解剖学用語の中国語訳については、拙稿「人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について」(『或問』12号)ですでに論じた。本稿では、ホブソンの『全体新論』が伝えた解剖学的内容を再度検討するとともに、『全体闡微』を含めたホブソンに続く医療宣教師による中国文西洋医学書の意義を明らかにしたい。

1. ホブソンによる中国文西洋医学書の概要

ホブソンの編訳した中国文西洋医学書には『全体新論』(1851)・『博物新編』(1855)・『西医略論』(1857)・『婦嬰新説』(1858)・『内科新説』(1858)があり、それらは後に『西医五種』として近代中国に広く刊行された¹⁾。すでにホブソンに関する様々な研究があるが、ここでは本稿の視点で論じたい。

『西医五種』の中でも最も早い成書である『全体新論』は多数の人体解剖図を掲載することから、当時の中国では、中国伝統の医学書等で示されてきた従来の「臓腑図」に代わるものとして注目された。そのことは、中西医匯通派と呼ばれる中国伝統の医家の一派で顕著である(中西医匯通派については後述する)。



『西医五種』(『全体新論』『博物新編』『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』合本扉)

次に、『全体新論』に示される解剖学的内容を焦点に検討したい。『全体新論』に掲載される図は 207 を数えるが、しかし、これらの図の全てが、人体解剖図ではないということに注意が必要である。207 の図のうち、ヒト以外の動物を扱った図は 41 を数え、しかもその全てがいわゆる解剖図ではない(以下の表 1 の備考で、該当する分類項目に「動物」と示し、その図数を記入した)。また、その他の自然科学一般を扱った図は 2 を数え(一つはレンズを通る光の性質を表す図、もう一つは空気中を伝わる音の性質を表す図)、視覚器・聴覚器を物理学的側面から説明している(表 1 の備考で、該当する分類項目に「その他」と示し、その図数を記入した)。これらの図を除いたヒトに関する解剖図は 164 を数えるに過ぎない。なお、この 164 の図の中には、ヒトの眼部表面の病態を扱った図が 8 点、ヘルニアの病態を扱った解剖図が 2 点含まれる(表 1

の備考で、該当する分類項目に「病態」と示し、その図数を示した)。またこの他、ヒトの胚胎や胎児、そして分娩を扱った解剖図が合わせて 11 点あり(表 1 の備考に示した)、これらを除けば、ヒトの正常形態を扱ったという意味での人体解剖図は 143 を数えるにとどまる。従って、『全体新論』に掲載される正常形態を扱った人体解剖図の数は、全体の七割弱を占めるに過ぎない。

分類		人体解剖図数	備考
運動器系	骨格系	37	動物16
	筋系	6	
神経系	中枢神経系	12	動物8
	末梢神経系	2	
感覚器系	視覚	13	病態8・動物3・その他1
	聴覚	6	動物5・その他1
	嗅覚	3	
	味覚	2	
	皮膚	5	動物7
消化器系		16	
循環器系	心臓	6	
	動脈系	16	動物2
	静脈系	2	
呼吸器系		3	
泌尿器系	腎臓	3	
	尿路	4	
生殖器系	男性生殖器	2	病態2
	女性生殖器	5	胚胎6・胎児2・分娩3
図数合計		143	備考小計=64/全図数総計=207

表 1 『全体新論』に掲載される人体解剖図の分類

『全体新論』が産婦人科に関する内容を大きく扱うことは、この書がいわゆる今日的な意味での標準的な人体解剖学、ないしは解剖生理学の書とは異なる性質をもつことを物語っている。

『全体新論』の示した産婦人科に関する 11 の解剖図は、胚胎・胎児・分娩の三つの内容に分類でき、図数は順にそれぞれ 6・2・3 を数える。これら 11 の図の中には、後のホブソンの『婦嬰新説』で掲載されるものと類似のものがあり、内容的に重複するものである。中でも分娩に関する解剖図の掲載は、助産に係わる知識の普及を目的とするもので、これは当時の中国の伝統的な医師が、自ら出産に関与するという習慣がなく、専ら医学の専門知識のない産婆の手に委ねられていたという状況を考慮してのことで、『全体新論』にはこうした中国の状況が述べられている²。つまり、ホブソンは『全体新論』で西洋医学の最も基礎とする解剖学だけでなく、特

に西洋の産婦人科に関する知識を当時の中国にもたらず意図を織り込んだのである。

上記の表1は『全体新論』に掲載される143の人体解剖図を、『全体新論』で示される解剖学体系の各項目上に分類し、該当項目に分類される図数を示したものである³。

『全体新論』を一般的な人体解剖学、ないしは解剖生理学の書であることから遠ざけているもう一つの要因として、中国伝統医学の経典を引用していることがあげられ、その件数も7を数える。それはつまり、部分的であるにせよ中国歴代の医学書にみられる格式に倣う等、ホブソンが中国の伝統を理解しようとしながら、自らの活動を展開したことを反映したものである⁴。しかしその一方、ホブソンの視点で、医療衛生的に遅れた当時の中国の状況が、各編で指摘されており、その件数は15を数える。ホブソンはこうした当時の中国の状況をみて、西洋の高度な医療を中国に普及させるためには、西洋の医療の状況を紹介し、さらには西洋の自然科学の思考法を中国に浸透させることが先決であると考えたものとみられる。そしてこのことが『全体新論』を単なる人体解剖学書、ないしは解剖生理学書ではなく、西洋医学の啓蒙書としての性質を強くさせている。そうしたホブソンの意図は『全体新論』に継いで、物理学・地学・化学・生物学といった西洋の自然科学全般を扱う『博物新編』を編纂したことにも表れている。そして『博物新編』の刊行で西洋の自然科学啓蒙のための目的を完結し、さらに続く『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』では、専ら西洋医学の実用面での内容を示すことで、文字通りの西洋医学の専門書とし、『全体新論』にみられた中国伝統医学の経典引用や自然科学に関する内容は皆無となっている。

また、『全体新論』では人体解剖学の周辺事項に関する内容等が多数扱われており、このことは『全体新論』の備える大きな特質となっている。例えば、ヒト以外の動物に関する解剖を扱った内容が24件、西洋における医学や解剖学、それに科学一般の状況に関する内容が合わせて26件、そして西洋と比較した中国の医療の状況に関する内容等が15件を数える。また「造化論」の篇や「靈魂妙用論」の篇では、宗教的内容を中心に論じている他、これ以外の篇にも宗教的な事項が4件みられる。また、臨床の実用を目的としたものではないが、眼科やヘルニア等の疾病、さらには助産法に関する概略についても紹介している。これらの特質は、『全体新論』が単純に基礎医学を伝えるための標準的な人体解剖学、ないしは解剖生理学の専門書とは一線を画したものであることを意味している。

次に、『西医五種』の編纂の意図について論じたい。『全体新論』の後に刊行された『博物新編』では、物理学・地学・化学・生物学といった西洋の自然科学全般が扱われ、さらに後に刊行された『西医略論』では、各種外傷治療法や包帯法・整骨法、加えて各種肉腫やヘルニア、脳炎・膀胱炎治療、更には眼科・耳鼻咽喉科等の内容、『婦嬰新説』では小児産婦人科の内容、

そして『西医五種』の最後の刊行となる『内科新説』では、内科全般と代表的な西洋の処方薬等の内容が示されている。こうした『西医五種』の流れを踏まえれば、医学を含めた自然科学全般を扱い、時期的に早い成書となる『全体新論』『博物新編』の二著と、臨床という医学の実際に即するような内容を扱い、時期的に遅い成書となる『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の三著というように、『西医五種』を大きく二つに分類することができる。西洋的な科学の思考法に不慣れな当時の中国に対して、ホブソンは先ず『全体新論』『博物新編』の二著で、西洋科学的思考法が受け入れられる土壌を築き、そして次の段階として『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の三著によって、西洋医学の実質を浸透させようとした意図が伺える。つまり、『西医五種』の筆頭である『全体新論』は、近代中国に初めて西洋の解剖生理学の体系を伝え、143を数える人体解剖図を示したものではあるが、厳格な意味で解剖生理学の専門書を目指したのではなく、中国に西洋医学の長所を知らしめるための啓蒙書、ないしは基礎医学的内容を扱った教養書としての性質が強くみられるのである。

『全体新論』は英国人宣教医師による編訳書であるから、近代中国においては西洋医学の積極的な受容ではなく、外国人の手による訳書を経ての移入という受け身的なものである。日本における『解体新書』が、邦人自らの手による訳書であることと比較すれば、間接的受容である。中国における西洋解剖学の第一歩という側面から、『全体新論』の果たした役割を短絡的に『解体新書』と重ねて理解する場合があるが、ここで留意しなければならないことは、『全体新論』が厳密な意味で解剖学の専門書ではないということ、そして、伝道のための内容を大きく盛り込んだものであるということ、そして外国人宣教師主導型のものであるということである。また、先述の通り、『全体新論』は多数の解剖図を掲載するものの、あくまで西洋の解剖生理学のおおよそを伝えた教養書としての趣の強いものである。従って、本格的な人体解剖学書として編訳された『解体新書』が、日本における西洋医学の原点的役割を担ったという認識と同様にして、『全体新論』を短絡的にみることは適当ではない。そうした留意点をもつ『全体新論』ではあるが、もちろんこの書が近代中国における西洋医学受容のイニシャルとして果たした役割の大きさは、評価されるべきである。

2. カーによる中国文西洋医学書

カー(John Glasgow Kerr 1824-1901 中国名；嘉約翰)は、ホブソンが中国を去った後も、ホブソンの主旨を継いで中国文西洋医学書の編纂活動を行った米国人医療宣教師として知られる。カ

一が編纂した中国文西洋医学書は、ホブソンをはるかに上回る多数のものがあることは、吉田寅(1982)でおおよそ知ることができる⁵。しかし、『西医五種』を踏まえたカーの著作活動の意味については明確にしておらず、本稿では、そのことを明らかにしたい。なお、本稿ではカーの著作群の中でも『西薬略釋』『西医内科全書』等、最も主要なものを焦点に論じたい。

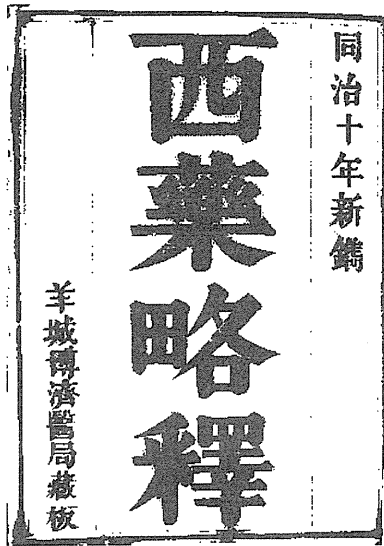
カーが編纂した書の中でも早い時期に刊行された『西薬略釋』(1871)⁶は、文字通り西洋医学で用いられる各種薬物とその臨床における処方を取ったもので、ホブソンの『内科新説』巻下にまとめられた「東西本草録要」の篇に代わる内容を伝えている。『西薬略釋』の序には、ホブソンの西洋医学普及活動の後を継いで編纂した旨が明記されているように⁷、カーがポストホブソンを意図していたことがわかる。また、『西薬略釋』には1871年の初版本の他、1876年に刊行の版本、1886年の増新版があり、版を重ねるごとに内容の充実がみられ、ポストホブソンの時代を幅広くカバーしている。

『内科新説』東西本草録要の篇では、中国を含む東洋原産のものも扱うが、あくまで西洋医学の思考による処方として用いる薬物を紹介したものであり、中国伝統の本草学の内容を示したのではない。東西本草録要の篇には「薬劑」と「薬品」の二項目があり、前者では15種類の処方薬が示され、後者には72品目の薬品が示される⁸。また、同じくホブソンによる『医学英華字釈』(1858)の薬之功力の篇では28の薬効分類が示され、薬品名目の篇には238品目の薬品が示される⁹。一方、カーによる『西薬略釋』の初版本では39の薬効分類と313品目の薬品が示され、ホブソンを上回る内容を伝えている。

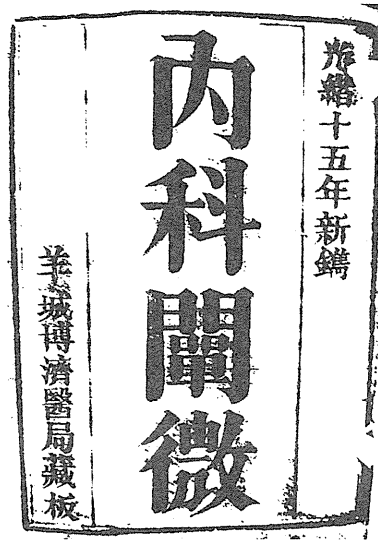
次に、1882年に刊行された『西医内科全書』について論じたい¹⁰。巻構成は全十五巻六冊で、それぞれに独立した巻名をもつ。その内訳は「胃腸各症」三巻、「肺部各症」三巻、「肝胆部各症」三巻、「脳部各症」三巻、「熱症総論」一卷、「雜症時疫類」二巻である。「肝胆部各症」の巻では、巻名に反映されていないが、心疾患・泌尿器疾患の項目を備えており、すなわち『西医内科全書』は文字通り、内科の各種疾病を網羅した著作であるのだ。またそれは、カーの著した中国文西洋医学書の中で最大規模のものであるばかりでなく、当時としても最大規模の中国文西洋医学書である。

『西医内科全書』総例でカーは、『内科新説』を含む『西医五種』が西洋医学の概要を伝えたことに触れた上で、自らの『西医内科全書』が『内科新説』にかわる本格的な内科学の専門書であると位置づけている¹¹。それは『内科新説』が、内科学の専門書であることを標榜する書名を用いながらも、東西本草録要の篇を立てて薬物に関する内容を大きく扱っていることを意識したもので、『西医内科全書』でカーは、薬物に関する一切の内容を排除し、代えて先述の西洋薬の専門書『西薬略釋』の参照を求めている。

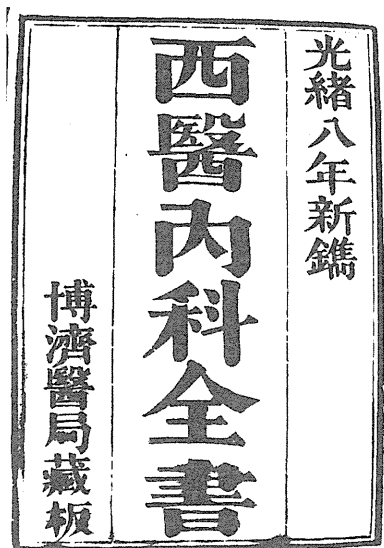
また、『内科新説』巻上冒頭、総論病原及治法の篇で記される西洋医学の概略や内科診断法に関する内容も、『西医内科全書』では排除されている。しかし、カーは『西医内科全書』刊行に先立つ 1873 年に『内科闡微』を刊行しており¹²、この書で実際の往診での実用を考慮した診断手順を示し、実質上『内科新説』総論病原及治法の篇に代わるものとしている。



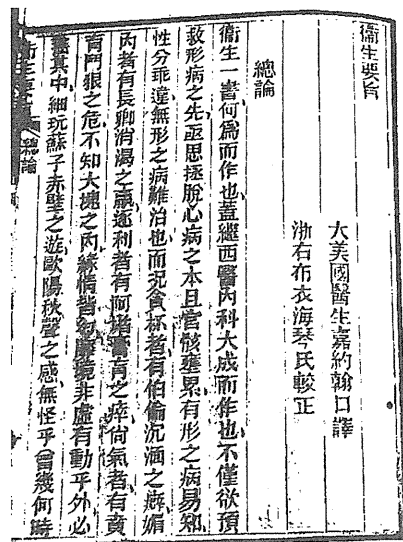
『西薬略釋』(初刊本)扉



『内科闡微』扉



『西医内科全書』扉

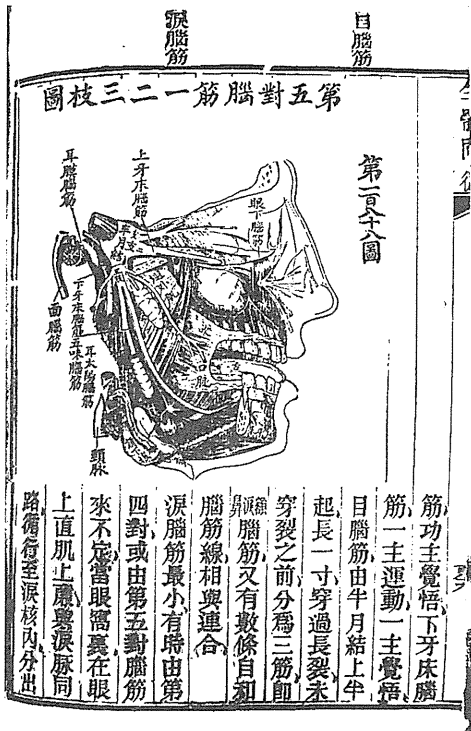


『衛生要旨』一丁表

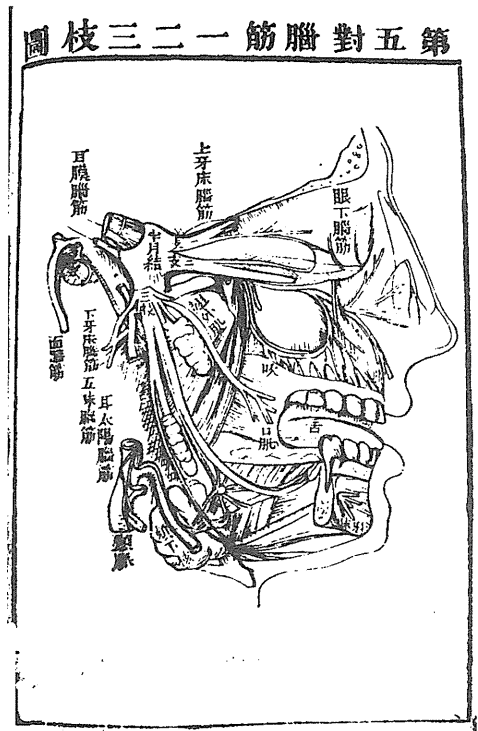
またさらに、カーは『西医内科全書』の刊行の翌年である 1883 年に、健康全般や予防医学、栄養学、そして公衆衛生学に関する内容を扱った『衛生要旨』を刊行している¹³。『衛生要旨』

の内容は、『内科新説』の巻上前半にある「総論病原及治法」「論飲食消化之理」「血運行論」「医理雜述」の項目をより専門的に展開させたものとなっている。つまり、『内科新説』で示される内科は、あくまで概略にとどまるものであって、内科学の専門書としては不足のものがあ、あるいは、西洋薬や衛生に関する内容を大きく扱う等、その主旨を越える部分があり¹⁴、カーはこのことを考慮して、『内科新説』で扱われる各内容を分化させ、より高度な内容を備えた『西薬略釋』『内科闡微』『西医内科全書』、および『衛生要旨』の四つの専門書としたのである¹⁵。

『西医内科全書』の各巻の冒頭には人体解剖図が掲載され、そのうちの「肝下面図」と「第五对脳筋一二三枝図」(今日の三叉神経に関する解剖図)は、オスグッドらの編訳した『全体闡微』(次節で詳論する)にある同名の解剖図と一致するもので、そこに書き込まれる中国語による解剖学の各語彙も全く同一のものである。カーは『西医内科全書』で用いた中国語による解剖学語彙が、『全体闡微』で定められたものを採用したことを明らかにしている。また、カーは『西医内科全書』で、『全体闡微』を人体解剖学の専門書として参照するよう推奨しているだけでなく、『全体闡微』をカー自らの著作群と一系列上のものとして扱っている¹⁶。



『全体闡微』「第五对脳筋一二三枝図」



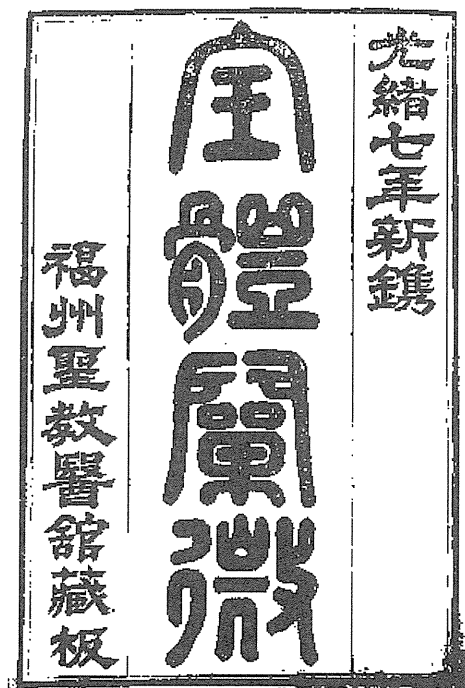
『西医内科全書』「第五对脳筋一二三枝図」

このように、カーが編纂した一連の中国文西洋医学書は、ホブソンによる『西医五種』が近

代中国における西洋医学普及のための初歩的内容しかもたないことを充分踏まえ、ポストホブソンの明確な意図の下で、西洋医学の専門書として刊行されたものなのである。そしてカーは、西洋医学一般の啓蒙書としての性質が強いホブソンの『全体新論』ではなく、オスグッドらが編訳した『全体闡微』を参照すべき人体解剖学の専門書と位置づけ、『全体闡微』で定められた解剖学用語の中国語訳を、自らの中国文西洋医学書編纂の基盤としたのである。

3. オスグッドらによる人体解剖学書『全体闡微』について

『全体闡微』は福州で宣教活動を行った米国出身のメディカルドクター、オスグッド(Dauphin William Osgood 1845-1880 中国名；柯為良)らが編訳した中国文による人体解剖学の専門書で、1881年に刊行されている¹⁷。ホブソンが中国での活動を終えた1858年以降も、依然として専門レベルを扱った中国文による本格的な人体解剖学のテキストが中国にもたらされることはなかった。そうした背景の中、1877年に来華宣教師の集会在上海で開かれた。その集会の決議により、中国文による人体解剖学の専門書の編纂がオスグッドの手に託され、そして刊行するに至ったのが『全体闡微』である¹⁸。



『全体闡微』扉

ANATOMICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE BY D. W. OSGOOD, M. D.		
General Terms Alphabetically Arranged		
Bone	骨	九
Cell	生 球	一一
Cell wall	球 圍	一一
Glands lymphatic	腺 淋 球	一七四
" nonsecreting	無分泌腺	七
" secreting	分泌腺	七
" sebaceous	油 腺	七
" sudoriferous	汗 腺	七
Haversian canals	強骨管	一一
Inorganic	土 質	一一
Marrow	骨 髓	一一
Matter animal	生 質	一一
" carty	軟 質	一一
Membranes mucous	膜 粘 膜	一五
" serous	膜 漿 膜	一四
" synovial	膜 滑 液 膜	一四
Nucleus	核 球	一一
Nucleolus	核 仁	一一
Organic	生 質	一一
Osteology	骨 質	一一
Periosteum	骨 膜	一一
Protoplasm	生 質	一一
Sensation	覺 覺	一七五
Solids	固 體	一一
Synovial bursa	滑 液 囊	一一
Tissue adipose	脂 肪 組織	一一
" cellular	透 視 組織	一一
" white fibrous	白 筋 絲	一一
" yellow elastic	黃 筋 絲	一一

『全体闡微』巻末の anatomical vocabulary in English and Chinese

次に、『全体闡微』の伝えた人体解剖学の体系を中心に検討したい。『全体闡微』に掲載される人体解剖図は 273 を数え、その全ては正常形態についてのもので、厳密な意味で人体解剖学の専門書に徹したものであることがわかる。

以下の表 2 に、『全体闡微』に掲載される各人体解剖図を分類し、その図数を示した。解剖図の分類にあたっては、『全体闡微』の示す解剖学体系に基づいて行った。また、比較のために『全体新論』に掲載される 143 の正常形態の人体解剖図を、『全体闡微』の解剖学体系上に分類し、その図数を併記した。

分類 \ 書名		全体闡微	全体新論
運動器系	骨格系	91	37
	筋系	34	6
循環器系	心臓	6	6
	動脈系	25	16
	静脈系	9	2
	リンパ系	7	0
神経系	中枢神経系	16	12
	末梢神経系	16	2
呼吸器系	肺	10	3
消化器系	口腔・咽頭	5	5
	腹腔	14	11
泌尿器系	腎臓	3	3
	尿路	2	4
生殖器系	男性生殖器	7	2
	女性生殖器	3	5
感覚器系	視覚	5	13
	聴覚	5	6
	嗅覚	1	3
	味覚	5	2
	皮膚	3	5
その他	鼠径部・会陰部	6	0
人体解剖図数合計		273	143

表 2 『全体闡微』に掲載される人体解剖図の分類と『全体新論』

『全体闡微』第二巻は専ら筋系に関する内容で、それと比較すると『全体新論』の伝えた筋系の内容は概略程度といわざるを得ない。また、複雑な血管系・リンパ系の位置関係については、解剖図の他に 17 の模式図を付して詳細に説明していることは『全体闡微』の一つの特徴で、そのことと比較しても『全体新論』の伝えた内容は概略的なものに過ぎない。そしてまた、末梢神経系の解剖図については『全体新論』が僅かに 2 を数えるのに対して、『全体闡微』では 16

を数え、その中には交感神経系のものが2つ含まれる。ホブソンが用いた交感神経に対する中国語訳は、『全体新論』では「多節白筋」「白筋筋」の2つがみられ、『医学英華字釈』では「臟腑百節筋」であるが、いずれの書でも交感神経系を専門に扱う項目は立てられておらず、解剖学的には物足りないものに終わっている。それに対して、『全体闡微』では交感神経の中国語訳を「自和脳筋」と定め、交感神経系に関する専門の項目を「自和脳筋類」と題して詳細に説明している。そして、巻末の対訳表には35の交感神経系の語彙がリストアップされている。ここでは、それらの例をあげるにとどめるが、『全体闡微』が、『全体新論』の伝えなかった本格的な解剖学の内容を備えたものであることは明確である。

オスグッドは、ホブソンの『全体新論』をあくまでも西洋医学の大要を中国にもたらしたものに過ぎないと批評している¹⁹。そして、『全体新論』が全編に渡って示した自然科学一般や人体解剖学の周辺事項、そして宗教的内容、あるいは、産婦人科に関する内容は、当然のことながら人体解剖学の専門書である『全体闡微』では扱っていない²⁰。



『全体闡微』脰[月過]部の篇より(鼠徑部・会陰部の局所解剖に関する内容を伝える)

なお、『全体闡微』には鼠徑部・会陰部に関する内容が、「脰[月過]部」の篇を立てて示されており、そこには正常形態を示した局所解剖図が6点掲載される。ホブソンは『全体新論』で、

ヘルニアの病態の概略を表す2点の解剖図を掲載し、ヘルニアの病態そのものを紹介しているが、『全体闡微』ではヘルニアの病態・病理を扱ったのではなく、あくまでも正常形態の局所解剖を示すことで、純粋な基礎医学としての人体解剖学を伝えている。

4. 結び

『全体新論』は近代中国において、西洋の解剖学に関する知識を中国文によって伝えた最も早い編訳書ということで知られ、多くの人体解剖図を掲載するが、本稿で述べてきたように、それはあくまで、西洋の自然科学一般を中国の地に普及させる意図のものであり、厳密には人体解剖学の専門書とは言い切れないものである。『全体新論』を含めたホブソンの『西医五種』が西洋医学の概略を伝えたに過ぎないことは、ホブソンに続く医療宣教師たちの間では共通した認識であり、そのことを踏まえた上で、ポストホブソンの医療宣教師たちは、専門レベルの内容を備えた中国文西洋医学書を次々と編纂・刊行していったのである。ポストホブソンの医療宣教師たちの間では、オスグッドらの編訳した『全体闡微』が人体解剖学の専門書として位置づけられ、そして、彼らは『全体闡微』で確定された解剖学用語の中国語訳を基盤に中国文西洋医学書を編纂していったのである。

一方、中国伝統医学の流れでは中西医匯通派が、医療宣教師の伝えた西洋医学を解釈しようとした。民国期以前に出現する中西医匯通派に限れば、それは主にホブソンの『全体新論』を中心とする解釈であり、ポストホブソンの中国文西洋医学書については、ほぼ扱われていない。つまり、医療宣教師たちはポストホブソンの意識の下で、専門レベルの西洋医学を中国に普及させようとしたにも係わらず、中国伝統医学の流れにおいては依然としてホブソンの『全体新論』を中心とする解釈にとどまり、本格的な人体解剖学の内容にまでは立ち入らなかったのである。

西洋の人体解剖図を引用する中西医匯通派については、すでに拙稿「中華文明上に組み込まれる西洋医学」(『或問』10号)で論じたが、以下の表3に再度、中西医匯通派の諸医書を示しておく(表3の中で、「他」と示したものは、引用した図に不明なものがあることを表す)。なお、以下の表3の中で、陳定泰による『医談伝真』の初刊は1875年であるが、実質的には『全体新論』よりも早い1844年までに執筆されており、当時の中国で開業する西洋人医師の所有する欧文による西洋医学書等から直接に人体解剖図を引用している。

書名\項目	著者	初刊	西洋の人体解剖図の引用
医談伝真	陳定泰	1875	他
臟腑図説症治合璧	羅定昌	1887	『全体新論』 『婦嬰新説』
中西匯通医経精義	唐宗海	1892	『全体新論』 『全体闡微』 他
華洋臟象約纂	朱沛文	1893	『全体新論』 『婦嬰新説』 他
中西匯參銅人図説	劉鐘衡	1899	『全体新論』 他
簡明中西匯参医学図説	王有忠	1906	他

表3 中西医匯通派による著作と西洋の人体解剖図の引用

次に、表3に示した中西医匯通派の諸医書に引用される西洋の人体解剖図の数を、人体解剖学の体系分類ごとに以下の表4にまとめた。なお、中西医匯通派は主に『全体新論』や『婦嬰新説』に掲載される人体解剖図を引用していることから、以下の表4では、『全体新論』『婦嬰新説』の両書にみる解剖学の体系分類を併せたものを採用した。また、中西医匯通派のほとんどが『医林改錯』に掲載される「親見臟腑図」を参照していることから、これについても以下の表4に分類した。

分類\書名	医林改錯※	全体新論※	婦嬰新説※	医談伝真	中西医粹	匯通医経	華洋臟象	匯参銅人	匯参医学	
運動器系	骨格系	0	37	0	1	2	1	33	1	7
	筋系	0	6	0	1	0	0	0	0	1
神経系	中枢神経系	0	12	0	1	0	2	6	0	1
	末梢神経系	0	2	0	0	0	0	1	0	1
感覚器系	視覚	0	13	0	1	0	6	11	0	2
	聴覚	0	6	0	0	0	0	2	0	0
	嗅覚	0	3	0	0	0	0	2	0	0
	味覚	0	2	0	0	0	0	2	0	0
	皮膚	0	5	0	0	0	2	3	0	1
消化器系		8	16	0	6	6	12	13	12	12
循環器系	心臓	1	6	0	1	0	1	6	1	2
	動脈系	1	16	0	2	3	2	8	2	3
	静脈系	0	2	0	0	0	0	1	0	0
呼吸器系		1	3	0	1	0	1	3	1	2
泌尿器系	腎臓	1	3	0	1	0	1	3	1	1
	尿路	1	4	0	0	2	1	4	2	1
生殖器系	男性生殖器	0	2	0	0	0	0	2	0	1
	女性生殖器	0	5	3	1	3	1	6	6	5
産婦人科	胚胎	0	6	2	0	0	0	8	8	4
	胎児	0	2	2	0	0	0	5	0	0
	分娩	0	3	24	0	0	0	3	2	2
	骨盤	0	0	9	0	0	0	1	0	0
図数合計	13	154	40	16	16	30	123	36	46	

表4 中西医匯通派の諸医書引用の西洋の人体解剖図²¹

(※『医林改錯』『全体新論』『婦嬰新説』は参考として記したもので、中西医匯通派によるものではない)

表4で明らかのように、『華洋臟象約纂』を除く中西医匯通派による諸医書では、引用する西洋の人体解剖図が50を超えないのが特徴で、西洋の人体解剖図の中でも、消化器系に関するも

のが特に焦点となっている。中西医匯通派が最も注目していたのは、中国伝統医学が古くから重視してきた「藏府」に他ならず、中国伝統の歴代の医書にみる「藏府」に対する関心をそのまま受け継いだことがわかる。つまり、中西医匯通派にとって西洋の人体解剖図は、あくまで視覚的側面での受容であって、中国古来の「藏府図」に代わる位置づけに過ぎず、西洋医学の理論・思考法を受容したものではないのである。

以上のように、ホブソンが去った後の中国においては、ポストホブソンの明確な意識の下で、カーラを中心とする医療宣教師たちが、専門レベルの高度な西洋医学を伝えていたのである。その一方で、それを解釈しようとする中国伝統医学の流れでは、依然として、ホブソンの伝えた教養レベルの西洋医学を中心としたものにとどまっていたのである。

中国において、その独自の伝統医学の思考法によって、ポストホブソンの伝えた本格的な西洋医学を咀嚼し、消化吸收して行くには、今暫くの時が必要であったのかもしれない。しかし、中国が辛亥革命を迎える直前、あるいは民国期に入ってから、日本留学組や欧米留学組の持ち帰った西洋医学や、それを積極的に起用する政治的な流れによって、西洋思想を中心とする医学の価値観が、中国大陸に構築されていったのである。

謝辞

本稿執筆に当たり、中国国家留学基金管理委員会から、2003～2005年にわたって、高級進修生としての研究活動の機会を頂戴した。また、富士ゼロックス小林節太郎基金研究助成の一部、立教大学SFR助成金の一部を使用した。各機関のご厚意に対して深謝したい。

【註】

¹ 本稿では以下のものを参照した。合信、1851(咸豊元年)『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版(筆者蔵)。合信、1855(咸豊五年)『博物新編』江蘇上海仁濟書館蔵版。合信、1857(咸豊七年)『西医略論』江蘇上海仁濟書館蔵版(立教大学図書館海老沢文庫蔵)。合信、1858(咸豊八年)『婦嬰新説』江蘇上海仁濟書館蔵版(南京中医薬大学図書館蔵)。合信、1858(咸豊八年)『内科新説』江蘇上海仁濟書館蔵版(南京中医薬大学図書館蔵)。合信、民国期刊『西医五種』(南京中医薬大学図書館蔵)。

² 『全体新論』陰経の篇に「西国接生之事。皆以医士主之…不如中国之用穩婆。而固取狡媼愚婦為也。故成孕受胎。及胎前産後事。宜医士無不深明其理者」とあるように、西洋では医師が分娩を行うことを紹介した上で、中国では専ら産婆の手に委ねられている状況を問題視している。

³ 本稿では、中国で最も広く読まれたと思われる江蘇上海墨海書館蔵版(咸豊元年新鑄であるが、咸豊三年の「贊」1葉が加えられている)のもので解剖図を数え、表を作成した。この版本や初版本では、解剖図が本文の各篇ごとに分けられており、解剖図が意図する解剖学上の分類は明確である。しかし、翻刻和本では原本と異なり、解剖図が巻頭に集められており、その本来の解剖学上の分類が不明確である。また、図数を数えるに当たっては、基本的に図に付される標題の有無と標題の意図を根拠にした。例えば、「耳内四小骨図」では4つの小骨を図数にカウントすることもできるが、標題の意図に従って、四小骨で1つの図と数えた。同様に「大人各牙

図」も1つの図と数えた。しかし「上臂骨図」の標題で示される図の例では、実質を採用し「上臂骨」と「正肘骨並びに転肘骨」の2つの図と数えた。同様の例である「十二日胚珠」の標題で示される図も、実質を採用し、「割開」と「未割」の2つの図と数えた。なお、初版本(Protestant missionary works in Chinese : Harvard-Yenching Library のマイクロフィッシュ『全体新論』参照)では石印による7枚の解剖図が織り込まれており、これには48の解剖図があるが、内容的には本篇に示される解剖図と重複するものが多々ある。

⁴ 『全体新論』自序でホブソンは「每見中土医書. 所載骨肉臟腑經絡多不知其体用. 輒為掩卷歎惜」と述べているように、中国伝統の医書を理解しようとした痕跡が認められる。また、同書肺經の篇に「割割肺体…便見管竅甚多. 即難經所謂二十四空也」と『難經』を引き合い中国伝統医学上にみられる肺の解剖学的記述を積極的に捉えようとしている。ホブソンの異文化理解への態度とは逆に、中国伝統医学あるいは日本の漢方医学の歴史の中では、この二十四という数が論争となっている。なお実際には『難經』そのものに「二十四空」の記載は見られず、ホブソンは後の『難經』の注釈書等から引用している。

⁵ カーに関する先行研究としては、多少の誤りを含むものが吉田寅「アメリカ宣教師カー(嘉約翰)の中国文医学書について」東京学芸大学附属高等学校研究紀要、1982等がある。この稿によると、『全体闡微』はカーによる編訳であるが、本稿で示した通り、オスグッドらによる編訳の誤りである。

⁶ 本稿では、嘉約翰、1871(同治十年)『西藥略釋』羊城博濟医局蔵板(立教大学図書館海老沢文庫蔵)参照。

⁷ 『西藥略釋』(初版本)のカー自身による英文序で「The Manual of Materia Medica…is a step in advance of what is contained in Dr Hobson's Works on this subject」と、ポストホブソンの意識の下に著したこと旨を述べている。なお「The Manual of Materia Medica」は『西藥略釋』の英文標題である。

⁸ 『内科新説』の目次にある薬品の項目には67品目のみが記されるが、本文では72品目が扱われる。

⁹ 本稿では、Benjamin Hobson 1858 *A medical vocabulary in English and Chinese* (『医学英華字釈』)Shanghai Mission Press(立教大学図書館海老沢文庫蔵)参照。

¹⁰ 本稿では、嘉約翰、1882(光緒八年)『西医内科全書』博濟医局蔵板(上海図書館蔵)参照。

¹¹ 『西医内科全書』の総例に「是書之訳. 乃繼医書五種而出也. 西医大略. 五種已尽之…而繼内科新説者. 不当有内科全書乎. 前人肇其端後人成其志」とあるように、ホブソンによる『内科新説』がその他の「西医五種」とともに、あくまで西洋医学の大略を伝えたものに過ぎないという点で、『西医内科全書』が『内科新説』を継いだものとするのは適当でないとしている。そして、導入的役割の『内科新説』が伝えなかった本格的な内容を『西医内科全書』の編纂によって中国にもたらしたという意味で、ホブソンを発端とする医療宣教師としての志は、成就したものとなったと述べている。

¹² 本稿では、嘉約翰、1873(同治十二年)『内科闡微』羊城博濟医局蔵板(上海図書館蔵)参照。

¹³ 本稿では、嘉約翰、1883(光緒九年)『衛生要旨』益智書会(上海図書館蔵)参照。

¹⁴ 1867 *Memorials of Protestant missionaries to the Chinese* American Presbyterian mission press (1967 成文出版社影印)では、『内科新説』の英文標題を“Practice of Medicine and Materia Medica”としている。なお『西藥略釋』にある英文序では『西藥略釋』の英文標題を“The Manual of Materia Medica”とし、「is a step in advance of what is contained in Dr Hobson's Works on this subject」とあるように、ポストホブソンの意識の下に編纂された旨が記されている。

¹⁵ このことは、カーが『衛生要旨』の中で、『西医内科全書』の扱わない予防医学等の内容を示したと述べていることから明らかである。

¹⁶ カーのその他の中国文西洋医学書でも、『全体闡微』についての同様の主旨が示されている。カーの主要著作群と共に『全体闡微』が、羊城博濟医局等から一括発行されていることから明らかである。当時、ホブソンの「西医五種」をはじめ、『全体闡微』やカーの著作群は、カーの参与する羊城博濟医局等から一括発行されており、そうした状況下でカーは敢えて『全体闡

微』の参照を求めている。

¹⁷ 本稿では、柯為良、1881(光緒七年)『全体闡微』福州聖教医館蔵板(上海図書館蔵)、および柯為良、1905(光緒三十一年)『全体闡微』惜蔭書屋(成都中医薬大学図書館蔵)参照。

¹⁸ 『全体闡微』の H. T. Whitney らの英文序によれば、この書は 1877 年に上海で開催された来華宣教師の会議で決議された要請を受けて編纂されたものである。そして、オスグッドは『全体闡微』の構成と巻一・巻二、および巻末の“anatomical vocabulary in English and Chinese”を書き終えたところで急逝(1880年8月)、残りの巻三から巻六は、Whitney らの手によって完成したという。また、『全体闡微』がモチーフとしたのは、Henry Grey(英 1825?~61)による *Anatomy, descriptive and surgical* であるという。原書と『全体闡微』との関係は、別稿で詳しく論じたい。なお、『全体闡微』の自序に「因蒼萃近年英美所出各書。翻訳…顔曰全体闡微」とあるように、オスグッドの頃、英・米ではより最新の各医学書が刊行されており、これをもとに編纂されたのが『全体闡微』で、『全体新論』よりも新しい内容の人体解剖学を扱っている。なお、『全体闡微』には 1905 年の縮刷再版本がみられるが、初版本にあった“anatomical vocabulary in English and Chinese”は省かれている。巻構成は、初版の巻一・二、巻三・四、巻五・六をそれぞれ統合して全三巻としているが、内容そのものに異同はみられない。

¹⁹ 『全体闡微』自序に「合信氏、曾著全体新論一書。搬西医之大略」とあることによる。

²⁰ ただし、『全体闡微』の総論では、ごく僅かではあるが動植物に関する記述がある。

²¹ 拙稿「中華文明上に組み込まれる西洋医学」『或問』10号、2005、34頁の表で示した『全体新論』『華洋臟象約纂』の解剖図数は誤りで、本稿で修正したい。本稿で中西医匯通派の諸医書は以下のものを参照した。王清任、1830(道光十年)『医林改錯』京都隆福寺胡同三槐堂書舖刻本(中国中医研究院図書館蔵)。陳定泰、1875(光緒元年)『医談伝真』緑雲洞天刻本(中国中医研究院図書館蔵)。羅定昌、1887(光緒十三年)『臟腑図説症治要言合璧(中西医粹)』光緒二十年刻本(成都中医薬大学図書館蔵)。唐宗海、1892(光緒十八年)『中西匯通医経精義』申江袖海山房石印本(上海図書館蔵)。朱沛文 1893(光緒十九年)『華洋臟象約纂』仏山(南京中医薬大学図書館蔵)。劉鐘衡、1899(光緒二十五年)『中西匯参考銅人図説』上海江南製造総局(成都中医薬大学図書館蔵)。王有忠、1906(光緒三十二年)『簡明中西匯参医学図説』広益書局(南京中医薬大学図書館蔵)。

Western Medical Books Written in Chinese of Post-Hobson

MATSUMOTO Hideshi

Quanti-xinlun(1851), a Western medical book written in Chinese compiled by Benjamin Hobson, an English medical missionary, is known as the first medical book which brought knowledge of modern Western anatomy to China. The purpose of this essay is to demonstrate development of Western medical books written in Chinese after *Quanti-xinlun* and responses on Traditional Medicine of Chinese to Western medical books written in Chinese, according to my research recently conducted in China

After he leave china, under the decided consciousness of post-Hobson more serious medical books written in Chinese were published one after another in China. Then, in view of the fact that *Quanti-xinlun* merely conveyed general education of human anatomy, *Quanti-chanwei*(1881) compiled by Dauphin William Osgood, an American medical missionary was published. This book actually became the first technical book of human anatomy in China. The biggest significance is that Chinese translation of vocabulary of anatomy established in the book became the basis of subsequent Western medical books written in Chinese compiled by medical missionaries.

On the other hand, Western medical books written in Chinese treated in the course of Traditional Medicine of Chinese, in so far as before the revolution of 1911 in China, remained in interpretations around anatomy conveyed by *Quanti-xinlun*. Thus, in modern China there were different trends of Western medicine directly brought by medical missionaries and treated in Traditional Medicine of Chinese.